広報

ここのえ

2004 11

特集 美しい九重、素敵な生活

No. 582

http://www.town.kokonoe.oita.jp/

地球上にここだけの木

かつて人々の生活とともにあった木

町内や久住高原の一部に見られるツクシボダイジュ。地元では「ヘラの木」と呼ばれるこの木、実は、地球上でここにしか見られない貴重品種です。

昔、釈迦がこの木の下で悟りを開いたと言われることから付けられた名前がボダイジュ。原野や疎林を好む陽性の木で、うっそうとした木陰をつくることから絶好の憩いの場所となり、古くから人々に親しまれてきました。

ボダイジュにはいくつかの種類がありますが、その中でも特にめずらしい品種となってしまったのがツクシボダイジュ。よく見ると、果実の形や葉の形が他のボダイジュと違うのがわかります（写真）。根を良く張ることから、家の裏に崖崩れ防止に植えられることが多かったそうです。また、皮をはいでロープをゆったり、木肌が白く節がないことから障子の桟に使われたりするなど人々の生活とともにあった木でした。しかし、人工林の増加などに伴い、急速に姿を消し、今や国と県から絶滅危機品種に指定されています。（15ページ関連記事）

ツクシボダイジュとともに非常にめずらしい品種が相映間のブンゴボダイジュ（県指定文化財）。日本でここだけに生息すると言われています。高さ15メートル、直径30センチの木５本がひとつの株から生えた姿は見事。この木は、日本自生種とされますが、中国に同一品種が生息することがわかっており、隔離分布ということで話題になっています。

▲ビロード状の毛が密生した果実

1981年、日本の空からトキが消えた。
この空に、もう一度トキの姿を見たい。

美しい九重

トキは稲作文化を中心とする日本人の生活に深く関わった鳥で、古くは日本書紀にその名が記されています。里山に巣を構え、近くの田んぼや沢でドジョウなどを餌に暮らしていました。

全長約75cm、翼を広げると約140cmと比較的大きなトキは、明治時代以降の乱獲により激減。さらに農薬などの普及、山間の田んぼや森林の減少など、環境の悪化が追い打ちをかけます。トキは1952年に特別天然記念物に、1960年には国際保護鳥に指定されたものの、減少をくい止めることは出来ませんでした。1981年、野生での生育数が5羽まで減った時点で、全頭を捕獲しますが、最後のトキが昨年死亡。日本産のトキは絶滅しました。現在、新潟県の佐渡トキ保護センターでは中国から借り受けたトキ（日本と同種）のつがいから生まれた58羽が育っています。

1981年以来、日本の空にトキは舞っていません。

九重の大空にトキをもう一度羽ばたかせたい。そんな大きな夢の実現に向けた動きが始まっています。

作家・川端康成氏がその作品の中で「ほんとうに美しい夢の国がここに浮かんだような」と表現した九重。この自然を、美しい心をもって守ってきた人々の歴史がこの町にはあります。その未来に現れた『トキの夢』。夢物語と感じる人もいるかもしれません。しかし、それは決して『はかない物語』ではありません。

「美しい九重」を舞台に、『トキの夢』に向けたしっかりとした歩みが始まっています。

かつて人々の生活とともにあったトキ

もっと遠くの夢を追いかけて

みんなそれぞれに何かできることがあるはず。

NPO法人　九重トキゆめプロジェクト21
代表　髙橋裕二郎さん

トキを再び日本の大空に呼び戻そう。そんな壮大な計画が九重で始まっています。その先頭を切り、夢を追い続けているのがNPO法人「九重トキゆめプロジェクト21」代表の髙橋裕二郎さん（中村上）。

「まず、ニッポニア・ニッポン（トキの学名）。それに惹かれましたね」と髙橋さん。

学名のとおり、トキは日本を代表する鳥。かつては、日本のどこでも普通に見られたと言います。しかし、乱獲や環境の悪化により激減。昨年、最後の日本産のトキ、キンが死亡。ついに絶滅します。トキ色という日本語が残っています。絶滅してしまった今、それがどんな色なのか知る人は多くありません。昨年、トキの人工飼育に成功した中国陝西省（せんせいしょう）洋県（ようけん）で髙橋さんは、初めて実物のトキを見ます。**「トキの色に感動した」**と髙橋さん。同時にトキ色という言葉を生んだ日本語の豊かさ・美しさを改めて感じたと話します。この美しい色の鳥を九重の空に呼び戻したい。その願いはますます強まります。

髙橋さんとトキの出会いは、一昨年。髙橋さんが会長を務める飯田高原デザイン会議へ、日本文理大学の杉浦嘉雄助教授（6ページ参照）から「トキの復活に取り組んでみては」と声をかけられたことに始まります。数年前からツルを飯田高原に呼ぶ計画をしていたこともあり、デザイン会議は、「トキ復活話」に乗ります。さっそく中国の洋県を訪問。その場で孵卵器（ふらんき）の寄贈を約束するなど、軽やかな活動を展開。トキゆめ基金の設立、NPO法人（特定非営利活動法人）化と矢継ぎ早の活動を展開します。ただ、トキ復活は簡単なものでなく、気の長いものだと髙橋さんは話します。

「私たちは、トキが住めるような環境を作っていくことを主眼にしているんです。それをみんなでしていこうと。トキを呼び戻すことより、みんなで夢を追い続ける過程を大事にしたいんです。会をNPO法人にしたのも、経理を透明化し、社会的信用を高めるだけでなく、多くの人と一緒に、ふるさとのため、日本のためにがんばりたいという意思表明でもあるんです」

ゆめ基金は一口1,000円。誰もが気軽に参加で

きるように、とこの金額にしました。会では、基金を集めるほか地域の人に呼びかけ、環境浄化の活動などを展開することにしています。また、子どもたちや高齢者も参加できる活動を心がけています。

「たとえば、小中学校では、トキのえさになるどじょうの生育調査を、反対に高齢者にはどの田んぼに昔どじょうがいたか、そんな話を聞きたいと思っています」

環境に配慮した地域づくりには、さまざまな手間が予想されます。米作りにしても草取りなどの手間がよけいにかかりますが、無農薬・減農薬で作ったものは、値段が高くても必ず売れるはず。

「そのためのネットワーク作りを私たちでできたら」と高橋さん。

業種や年代にかかわらず、**「みんなそれぞれに何かできることがあるはず」**。

それは、高橋さんたちの進めた地域づくりの基本です。

今、飯田高原は町内でもひときわ元気だと言われます。その原動力のひとつが約20年前からある飯田高原デザイン会議。

会員の出入りも自由なこの会議、上下関係もあまりなく、若い人もどんどん意見を言います。この雰囲気が融通の利くことにつながり、強い結束力、早い対応、軽やかな行動力につながっているようです。

デザイン会議により実現したのが、トキプロジェクトのほかに、氷の祭典、ナイトハイク、朝日長者七不思議巡り、東洋一のマラソンコース、盆踊の滝まつり、野焼き・・・。例えば、第1回氷の祭典は、12月の忘年会で話が出て、翌年2月に実現させたというある意味、無謀（もしくは冒険精神）ぶりは、この会ならではのもの。

「デザイン会議は、『いいかげん』でなく『良い加減』なのが良いところ」と高橋さんも笑います。そして、**「事業ごとに課題はあるとしても、デザイン会議自体にはないかな。続けることが第一」**。

飯田高原の中でお互いの顔が見える活動をしてきたことも良かったようです。

「やる気のない者が何人集まってもいいものは出来ない。やる気がある者が少しでも集まった方がいいものが出来る。お互いの顔が見えるからやる気が起こってくることもあると思いますよ」

そういった意味で、今回町が合併しなかったことも良かったと話します。

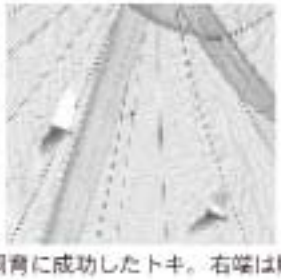
「小さくても、やる気をもってがんばっていけばやっていけますよ。それに今度の（合併）話で九重町が初めてひとつになったと思う。今も良いところはたくさんあるけど、これから良いところはもっと出てきますよ。自分のためではなく、町のために集まってくれるメンバーがいることはすばらしいです」

「若い頃から、とにかくじっとしていなかった。人生は1回。何か早くしないと時間がないと思ってきた」と話す高橋さん。普段は九重森林公園スキー場の支配人をしています。スキー場をつくるときも、さまざまな障壁を乗り越えてきました。誰もが「えっ？」と思った九州でのスキー場、無謀とも怖いとも思わなかったそうです。同じように、さまざまなイベントを仕掛けていく上でひるむことは、一度もありませんでした。

「それよりか、おもしろいからやってみよう、何とかしてみようと思ってきました。まずは自分たちが楽しまなければ」

高橋さんと飯田高原の人々が追い続けた夢。そして今、トキ復活という、もっと遠くの夢を追い続けています。

夢は持ち続けると必ず実現するという人もいます。しかし、夢が叶う、叶わないではなく、追い続けることが大事なのかもしれません。少なくとも、それが地域に大きな力をもたらしているのは間違いありません。



▲中国洋県で人工飼育に成功したトキ。右端は孵卵器を中国のトキ保護センターへ贈る高橋さん

大きな花を咲かせたい 九重トキゆめプロジェクト21の戦略

目的は大きく分けてふたつ。里山再生を基盤とした『持続可能な地域づくり』を、トキを象徴にさまざまな立場の人が連携・協働し実現していくこと、そして地域の大人や子ども達の夢、ふるさとへの誇りを育む『人づくり』です。そのために、上図の6つの要素が一体となり、『トキが住めるまちづくり』という大きな花を咲かせようと言うものです。

みんなの力が未来のトキを育てます
トキゆめ基金

トキゆめ基金では「①中国の洋県での繁殖を支援」しながら、未来は"九重のトキ"が実現するよう「②トキの住みやすい環境をつくっていく」取り組みを行っています。

基金は一口1,000円（3口以上の寄付には、ときめきバッチをプレゼント）。

詳細は環境省長者原ビジターセンター内「九重トキゆめプロジェクト21」。

☎ 79−2154まで。

きっといつか、九重にトキは舞い降りる

日本文理大学助教授
杉浦嘉雄さん

「まるで天女のようでした」

2000（平成12）年9月、秋の夕暮れどき。中国・西安からバスで9時間かかるという陝西省洋県（ようけんしょうけんしょうけんしょう

『佐藤さんに聞いてみたんですよ。こんな地域グループはないだろうなあ、と思いながら』すると予想外の答えが返ってきます。

「ひとつだけあります。飯田高原デザイン会議です」。

杉浦さんと飯田高原デザイン会議との初会合は2002（平成14）年3月10日。まず杉浦さんが驚いたのはバラエティーかつ多くのメンバーが、その場に集まっていたことです。その反応にまた驚かされます。杉浦さんの話す「100年規模のトキが住めるまちづくり計画」の原案を静かに聞く参加者の様子に『私の夢をみなさん自身の夢として心から楽しんでおられる様子が実感できました』。「この取り組みの最終目的はトキを誘致することではない。その夢を真剣に追いながらも、まず、九重の自然をトキが安心して住めるように再生・保全し、その自然をいつまでも大切にして上手に活用しながら、九重の文化や地場産業を育んでいくこと」や「私たち大人が夢を持ち、身をもって子どもに示すことで、子どもがふるさと・九重を誇りに思い、夢を信じて生きていくこと。それが本当に豊かな人生というものではないか」といった参加者の意見に杉浦さんは感動します。

一方、「町民のみなさんと、その夢を追いたい。ただ一つだけ不満があるのですが・・・。100年後には、この場にいる誰も生きていませんので、せめて50年後に出来ませんか」と町長が話せば、農協職員からは「やっぱり、農薬を売る農協から環境に貢献できる農協にしなくちゃね」。

「もし『性急な地域づくり』であれば、それぞれの立場の人は利益代表と化してしまうと思うんです。しかし、50年後、100年後の夢を語る『スローな地域づくり』だからこそ、その実現のための『仲間』として楽しくゆとりを持って語ることが出来たんでしょうね」

感動の出会いから2年後に「九重の実行力」に杉浦さんは再度驚かされます。飯田農協が「全地域減農薬」をスローガンに掲げ、現在では目標をほぼ達成できました。

トキをめぐっては、いくつかの不思議な偶然の物語があります。1981年、日本の空からトキが消えたその年、中国の洋県で奇跡的にトキが発見されたのもそのひとつと言えます。

『洋県に足を運ぶうちに、そこが大分と大枠で一致していること気がついたんですよ。洋県は内陸の割には、雨が多く、雑木林も多い。段々畑や棚田があり、しいたけの栽培もしていました。大分と同じでしょ。（大分でのトキの復活は）科学的には可能と思いました。ただそれだけじゃないんです。大分と洋県は緯度が同じという物語性があるんです。もちろん、緯度が同じだからというのは科学的には意味がないかもしれませんが、不思議な一致です。まるで『運命の赤い糸』に結ばれているように』

科学的、物語性が揃いました。あとは人の力。

出会いから2年半、杉浦さんと九重の人たちの二人三脚は着実に続いています。中国のトキ保護センターへの孵卵器の寄贈、トキゆめ基金やNPO法人の立ち上げ、「九重の自然を守る会」や「日本野鳥の会」などからのアドバイスや応援など・・・。日本文理大学でも、大学周辺の自然環境をまるごと守っていく「ビオトープ計画」を実行したり、環境マインドの育成に力を入れたりと環境問題に対応した大学づくりをすすめており、この夢への側面支援体制が出来てきています。また、中国で希少野生動物などの問題に取り組んできた蘇雲山さん（環境文化創造研究所主席研究員＝日本の民間研究所）を客員教授に迎えました。

蘇さんは杉浦さんと初めて会ったときこう語ったといいます。

「いつか、日本のどこかでトキを真剣に考えてくれる地域が現れると信じていました。その地域は阿蘇くじゅうにあるのですね。私の名前は阿蘇の蘇と、九重の美しい風景にあるような雲や山です。何か深いご縁を感じます。ぜひ、私にその夢を手伝わせてください」

夢を支える輪は広がっています。杉浦さんは『大学とのパイプ役にももちろんなりますが、何よりもみなさんと一緒に取り組んでいきたいですね。飯田で子ども達を対象とした環境教育に取り組んでみたいです』。

『自然景観も魅力ですが、圧倒的に人に魅力があります。里山文化も息づいているし、何かここで出来るという吸引力を持った町』と九重町の印象を語る杉浦さん。

『ここで、一緒に夢を追うことで、いろんな人の間に立場を越えた信頼関係が出来る。これが最大の強みです。九重の人たちなら、未来の世代のために、九重の大空にトキが舞う夢を実現してくれると確信しています。一生懸命夢を追い続け、トキの住めるまちづくりをすすめることで『トキのために』がいつのまにか『トキのおかげで』豊かになったということになるはずです。真剣にやれば必ずトキはプレゼントしてくれます。トキの恩返しですね』

トキをめぐる、いくつかの不思議な偶然や物語。その夢も不思議だと杉浦さんは話します。

『幻の鳥とその夢は一見実態のないもののように見えますが、確かに人の心を奮い起こさせる何かがあります』

実際に、その夢の元に、さまざまな事業が始まり、現実の成果も出てきています。人々の信頼関係はさらに強いものとなり、大きな夢を持つことが出来た。そしてこの九重がもっと好きになった・・・すでにトキの恩返しは始まっているのかもしれません。きっといつか、九重にトキは舞い降りるはずです。

トキの分布図。「九重（及び移動距離の半径60km以内）でトキが生息したという文献はいまのところありません。しかし、夢を追いつつ、宝物探しのように文献探しをすればいいんです。もし文献が出なくても、全国の『トキが住める地域づくり』を応援しつつ、環境を整えていけば、きっとトキが九重を選んでくれます』

九重町は圧倒的に人に魅力があります。何かここで出来るという吸引力を持った町です。

着実に九重の自然を守り伝える

九重の自然を守る会
理事長　渡辺格雄さん

「ほら、あそこにキジがいる」

飯田高原にある長者原ビジターセンター。約260種類の草花が生息するという自然豊かな環境にあるこの建物での会話は、植物や動物についての会話が中心となります。キジがいると教えてくれたのが、「九重の自然を守る会」理事長の渡辺格雄さん（湯坪下）。30メートル先にキジのつがいがいると言うのですが、なかなか見つけることが出来ません。

「ほら、あの岩の所」。渡辺さんが指さします。ようやくキジの姿を認めることが出来ました。どうしてすぐに鳥や植物の姿を見つけることが出来るのか聞いてみると、**「気配りというのかなあ、普段から自然に意識をもって接していると知らず知らずにそうなっていくんですよ」**と笑顔で答えてくれました。

終戦後、飯田公民館を中心に観光客の増加を見越した「ガイド教室」が生まれます。やがて見込みどおり観光客が増加。その多くが登山を目的としていました。それにつれ山の植物の盗採やゴミの投げ捨てが目に余るようになってきます。自然を愛する地元の人々の危機感が高まる中、1961（昭和36）年、「九重の自然を守る会」が発足しました。**「郵便局で仕事をしていましたんで、外務員で飯田じゅうを回っていると、おやっ、と思うようなことが増えてきたんですよ」**と当時を振り返る渡辺さん。同会の発足に関わります。それから40年以上。九重の自然の移り変わりを見てきたことになります。

「野焼きがされなくなったところは、木が大きくなって、林になったりしたところがあるけど、基本的には変わっていませんね」

飯田高原の自然の美しさを表現した言葉に、「春は黒、夏は青、秋は赤、冬は白」というのがあります。春の黒が野焼きにあたります。

「昔は牛のダニを防ぐとかの効果が野焼きにはあったんですが、小さな草花の生育環境をつくることでも効果がありました」

かつて、野焼きの風景は、多くの所で見られましたが、最近ではめっきり少なくなっています。同会では、野焼きを再開させるための取り組みを行っています。坊がつるでの野焼きも3年前に復活。野焼きの日には多くの観光客も訪れ、春の黒を楽しんでいます。

「自然を守る会は、自然を原始に返すというのではなく、大事にしつつも、例えば山芋を掘るとか生活に必要なことは進んで自然を利用しようという考え方です。そのことを通じて、自然の恵みを実感しながら、自然に謙虚になる。それが『守る』ことにつながると考えています」

戦後、日本は経済性を最優先。その結果、多くの自然が破壊されてきました。同会初代理事長の赤峰武さんが予言したとおり「人間生活にマイナスとなるまで自然は破壊された」とも言えます。飯田高原も幾多の開発話が持ち上がりましたが、同会は開発当事者とねばり強く話し合うことで、豊かな自然を守ってきたと言います。その根底には、同会に集う人たちの自然に対する謙虚さがあったと言えます。

同会の大きなテーマは「この自然をいかに次代に残していくか」。そんなとき、耳にしたのがトキを復活させる計画。この計画の第一の目的は「トキが住めるような環境をつくっていくこと」。同会もこの計画を側面からサポートしていこうとしています。渡辺さん自身も中国の洋県へ行き実物のトキを見ました。

渡辺さんは**「エサを取るのもゆっくりしているんですよ。えらい、のんびりした鳥だなあと思いました」**。

トキは、人間と共存してきた鳥です。昔ながらの生活や自然がなくなっていくとともにトキは生き続けることができなくなり、ついに日本産のトキは絶滅しました。のんびりした鳥だからこそ、人間のあわただしくなっていく生活についていけなくなったのかもしれません。

渡辺さんは普段時計を見ることがないそうです。のんびりしすぎて、時々、迷惑をかけてしまうと笑います。最近流行のスローライフを地でいっています。トキ復活計画も、50年、100年という、のんびりとしたペースで進んでいきます。このペースに、トキも合わせることができ、九重の空にトキが羽ばたく日が、いつかきっと来るはずです。

「会に若い人がだんだんと入ってきてうれしい。子ども達に、自然ってこんなにもいいものだよ、と伝えたいと思い先生達との交流勉強会も始めました」

写真図鑑を作る話も進められています。つい先頃は、初代理事長の赤峰武さんの画文集「おっとんたけしょの画文集」を発刊（左ページ参照）。毎週日曜日などに行われる自然観察会も続いています。10年ほど前から「一人一石運動」というのも始めました。登山口に石を積み重ねておき、登山道で修復が必要なところに登山者がその石で修復するというものです。その石のように九重の自然を守り、次代に伝える作業が着実に積み重ねられています。

「自然は一日一日同じものがない。見飽きない」と話す渡辺さん。今一番好きな花がオオヤマレンゲ。6、7年前、間伐で一緒に切られてしまったオオヤマレンゲを発見。家に持ち帰り、種を取り、苗を作り、退職記念に配って回ろうと考えました。渡辺さんはすでに2年前に退職。退職記念には間に合いませんでしたが、渡辺さんが育てたオオヤマレンゲの苗が配られ、いろいろなところで白い花が見られる日も近いようです。

自然の恵みを実感しながら、自然に謙虚になる。それが〝守る〟ことにつながると考えています。

◀8月11日、自然公園指導員としての長年の活動に功績があったとして、渡辺さんは環境省表彰を受けました。

■ 九重の自然を愛した３人に思いをはせて

「川端康成と高田力蔵そして赤峰武」記念行事が10月10日から11日まで長者原ビジターセンターを中心に行われました。主催は「九重の自然を守る会」で、今年が作家・川端康成氏の33回忌と秀子夫人の３回忌、画家・高田力蔵氏13回忌、同会初代理事長の赤峰武氏の没後20年にあたるだけでなく、川端文学碑が建立されて30年、国立公園指定70年になることから企画されたものです。

当日は、守る会会長の嶋田裕雄さんによる講演「川端康成先生と高田力蔵先生と赤峰武先生、と九重」が行われたほか、高田氏の思い出を次男紀春氏の妻・恵子さんが、九重に縁のあった画家・フランソワ・パブレさんとの思い出を髙橋裕二郎さん（同会理事）がそれぞれ語りました。

各会場には川端・高田・赤峰各氏の作品や縁の品物が展示されるなど、訪れた客は、芸術を通して九重の自然を味わっていました。

■「おっとん」の熱い愛情を忘れずに

「九重の自然を守る会」は同会初代理事長・赤峰武さんが描いた絵画や執筆した文章、縁の人の回想などを集めた「おっとんたけしょの画文集」を発行しました。赤峰さんは1910（明治43）年湯坪に生まれ、日田中学（現日田高校）を卒業後、九重山硫黄鉱業所の勤務などを経て1950（昭和25）年から飯田郵便局局長へ。局長時代は登山記念スタンプを彫って窓口に備えたほか、「飯田高原郵便局」への改称にも努力しました。1961（昭和36）年、「九重の自然を守る会」の創立にかかわり初代理事長に。多くの人材養成と、自然を大切にする思想を地域の人に植え付けたほか、ミヤマキリシマの保護と植樹、歌碑・文学碑の建立など多くの功績を残し、1984（昭和59）年（享年74歳）に亡くなって以降も同会の精神的柱であり続けています。

画文集は全64ページ。終戦直後から亡くなる直前の絶筆まで32点の油・アクリル画などのほか多数のスケッチが納められており、どれもが日田中学の同級生であり生涯の友人であった画家・宇治山哲平氏の言う「九重飯田の景観を、愛情を込めて素朴に描いたもの」です。

画文集は１冊2,000円（本体1,905円）。問い合わせは長者原ビジターセンター内自然を守る会事務局（☎79－2154）へ。

次のページは、
嶋田裕雄さんの語る「川端康成先生と高田力蔵先生と赤峰武先生、そして九重」

作品の中に残された永遠の自然

～九重の自然を愛した
高田力蔵・川端康成・
赤峰武

高田力蔵と九重

「北の方に堂々とした山が見える。あの山を描いてみたい」

終戦直後の阿蘇。画家・高田力蔵氏が根子岳を描いていたとき、ふと後ろを振り返ると見えた山々。それが高田氏と九重の出会いです。

高田氏は1900（明治33）年久留米市生まれ。幼い頃から絵に親しみ20代から30代の頃は、後年の作品からは想像できないようなシュールレアリズムの作品を多く描き、主な発表の場である二科展では連続入選を果たす活躍をしていました。しかし、1937（昭和12）年、表現の行き詰まりを感じフランスへ。19世紀フランス絵画を模写することで、表現の見直しをしました。この経験をもとに戦後は風景画の大家となり、数多くの連作を残しますが、戦争中は絵を描く環境にめぐまれないなどの苦労を重ねます。戦争が終わり、これで思い切り絵が描けると訪れた阿蘇。そこで九重に出会います。

阿蘇から眺めた九重の山々の印象がまだ鮮明に残る頃、高田氏は福岡の展覧会で飯田高原を描いた絵を目にします。その絵の作者に九重・飯田高原の存在とともに知らされたのが赤峰武氏。赤峰氏は初代の「九重の自然を守る会」理事長で、当時は九重山硫黄鉱業所に勤めていました。

高田力蔵と赤峰武

その存在を知ってわずか1、2ヵ月後の1945（昭和20）年暮れ、高田氏は初めて九重・飯田高原を訪れます。当時の汽車は復員・買い出し等の人々にあふれ、道路も十分整備されていませんでした。混乱したこの時期に九重を訪れた高田氏の情熱は並大抵のものではなかったと言えます。高田氏にとって、この旅は驚きの連続でした。十三曲がりに入った高田氏は「九州にこんな渓谷があったのか」と息をのむとともに、九重の自然にひとめぼれします。

筌の口温泉に宿を取り、さっそく赤峰武氏が勤めていた硫黄鉱山の事務所をめざします。すぐ近くだと聞いて歩き始めたものの、いつまでも事務所は見えません。雪が降り、暗くなっていく道を歩くうち、心細く思っていたときにポツンと暗闇の向こうに光が。そこが赤峰氏のいた事務所でした。高田氏はこの時のことを「私は、厳しい自然の中でのあたたかさ、赤峰さんのあたたかさ、ふたつのあたたかさに触れ生涯の友人になれた」と振り返っています。以後、高田氏は20年近く毎年九重を訪れ、「九重山群連作」など200枚以上の作品を発表、「九重は私にとって単なる写生の場所だけでなく、私の芸術・人生に対する信念を固めてくれました」という言葉を残しています。

自然を守る会と赤峰武

終戦直後、時代の振り子は大きくふれていました。これまでの閉塞感から一気に解放された自由な空気を人々は吸っていました。「いきおいこれまでの考え方をすべて否定する風潮も生まれてきました。飯田高原も同じでした。そんな中「すべてダメでなく、古くても良いものをふるいにかけていこう」という考えが昭和20年代の公民館活動の中から出てきます。人々の、自然と共存した昔ながらの生活の再評価が始まります。一方、山登り人口が増えるとともに、高原では登山者でなく登山客が増えてきます。登山客からいろいろなことを聞かれる機会が増えるにつれ、自分たちは地元のことを案外知らないということにも気づきます。そこで、1955（昭和30）年頃、飯田高原ガイドクラブが結成されますが、さらに登山客が増え、ごみの投げ捨てや植物の盗採なども増えます。この対策として1961（昭和36）年に生まれたのが「九重の自然を守る会」。初代理事長として白羽の矢が立ったのが赤峰武氏。赤峰氏は、最初会の名前を「九重の動植物を愛護する会」にしようと思っていたようです。動植物の中には人間も含まれています。つまり人々の生活を含め九重に存在するものすべてを愛し、護ろうという考えが基本となっています。

また赤峰氏は、この会を「文化運動」と位置づけ、「寛容と忍耐」を旨としました。取り締まりや指導という上下の関係でなく、一緒に学習と実践をし、自然を守っていこうと

いうわけです。自身も「自然保護運動をいわゆる住民運動として、反権力闘争であるとする急進的なやり方にはぴったりと結びつけない。（中略）自然保護運動は、説得力を積んでかからなければならない。そのためには、自然を愛し、人間を愛する、謙虚で節度を持った運動でなければ説得力も生まれない」という言葉を残しています。

赤峰氏は「自然を守る会」の精神的柱でした。1984（昭和59）年、赤峰氏が亡くなったとき会員は茫然自失だったと言います。しかし、「その現の後ろ姿を忘れず、見失うことのないよう」と嶋田裕雄氏（現自然を守る会会長、当時は公民館職員）が言うように、赤峰氏の存在・考えは、今でも「自然を守る会」の礎であり続けています。

川端康成と九重

川端康成氏が初めて九重を訪れたのが、1952（昭和27）年（28年に再訪）。54歳の時です。川端氏と古くからつきあいのある高田力蔵氏と当時の大分県知事・細田徳寿氏の働きかけによるものでした。「私が遠く九重山まで行ったのは高田力蔵氏の九重の絵に誘われたようなものであった。あるいは、高田力蔵氏が描く感興に動かされたと言っても良い」と後に川端氏は書き残しています。川端氏は、最初「九重に行っても何も書かない」と断ったものの滞在中、「（九重の）風景をみて歩いているうちに、九重山を中心にしてなら書けそうな気がしてきた」と発言。翌年4月九重を主舞台にした「波千鳥」の発表につながります。「波千鳥」では川端氏がみた九重の風景が、登場人物のひとりの手紙によって美しく描かれています。

「山々に取りかこまれた、あるひは四方の山々にささへられて浮かんだ、高原といふ円さがあります。ほんたうに美しい夢の国がここに浮かんだやうな高原でした。山は紅葉してゐますし、すすきの穂波は白いのですけれど、私は高原にやはらかい紫がただよってゐるように感じました。（川端康成著・波千鳥より）」

当時、川端氏に同行した嶋田裕雄氏によると、越山所社宅の間取りやそこの売店で売られている品物の値段など、実際にあるものはきちんと書けるよう川端氏は克明なメモを取っていたそうです。

「だから波千鳥に出てくる九重の様子に間違いはないのです」と嶋田氏。むしろ自分たちが気づかないことを川端氏の文章から教えられたと言います。嶋田氏は川端氏の文章を見たとき「たった一回通っただけで、高原という円さがある、紫がただよっているといった我々が気づかないことを表現してくれた」と驚きを隠せなかったと話します。

▶九重を訪れた川端康成氏。左から2人目。

3人に共通するもの

「自然を守る会」初代理事長・赤峰武氏も絵画で優れた作品を残しています。赤峰氏の絵画の特徴は写生を基本としたことです。絵の対象ありのままを細部に渡り描き込んでいきました。同じく生涯にわたり写生を基本に風景画を描き続け、誰が見ても素直に共感でき納得できる作品を世に送り出してきたのが高田力蔵氏。自身も「私の風景画は、写生した地元の人々の納得を大事にする」と述べています。このことについて、川端康成氏は「自分の画は大変分かりやすいと自分で言うのも、謙遜の冗談の中に強い自負を込めてであろう。今日の日本には、分かりやすい素直な写生を余りありがたがらないような風習があるが、実はこれこそ難しく、真の画技の問われることであり、また常に本道の第一義であろう」と記しています。その川端氏も、詳細な取材メモに見られるように、ありのままを絶妙な筆致で表現し続けた作家でした。ある時、「私は小説家になりたいのですが、どうすればよいのでしょうか」と問う青年の質問に川端氏は「まずは両親の写生をしなさい」と答えたそうです。

▲赤峰武氏（タデ原にて。昭和49年）

高田・川端・赤峰三氏に共通するもの、それは九重の自然に対する愛情と写実性です。だからこそ私たちは、三氏が残した傑作の中にいつまでも古びない永遠の九重の自然を見、感動を新たにするのかもしれません。

「この飯田高原は多くの人も言ふやうに、ほんたうにロマンチックななつかしさです。やはらかくて、明るくて、そしてはるばるといふ思ひをさせながら、静かに内へ抱きつつまれたといふ思ひをさせます。（川端康成著・波千鳥より）」

※この原稿は10月30日に行われた「川端康成と高田力蔵そして赤峰武」記念行事での嶋田裕雄氏の講演をもとに作成しました。

ただ生産するだけでなく人生を農から学んだ

時松和弘さん

飯田奥郷地区に築227年の古い家があります。家は夏をもって旨とすべし。古くから伝えられるこの言葉のとおり、風通しの良いこの家は、風雪に耐えてきた歴史の重みの中にも軽やかさがあり、現代的なものさえも感じます。ここの主が時松和弘さん。平成10年、遠縁にあたるこの家を入手。ほとんど手は加えていません。

「住みにくいとは、私たちは思わんね。200年も住んじょったんやしね。冬はさみいけんど、こんなもんじゃろう。これで住んでこられたわけだし・・・」

時松さんといえば、まず方言の名手という人も多いようです。その温かな語り口さながらの人柄は誰からも親しまれています。また、ありのままの自然を受け入れ、おおらかに生きていくその姿勢に多くの人が共感を寄せています。飯田で農業に取り組み、自然を愛する人々との交流を重ねるうちに身につけた時松さんの姿勢。そのひとつが昔ながらのものを守っていくことです。特に、「九重の自然を守る会」、そして同会初代理事長で、時松さんにとっての"裏ん おいさん"赤峰武さんから多く学んだと話します。

「自然というのはたな、百姓の生活を守れば、(自然は)守られんでん、守られていく。飯田の自然は原生林じゃのうして、こうやって野原とか百姓に関連ある自然じゃねえへ。百姓が昔ながらの生活ができて、成り立っていくようなシステムを作ること。自然を守るということは、そういうこつなんだ、というようなことを赤峰武さんから聞きよったんよ。それが、自分の原点かもしれんね」

時松さんは自分の子ども時代について、自宅にはいつも動物がおり、「自然を守る会」や「野鳥の会」の活動にも参加。やがて動物園の飼育係になりたいと思うようになったと振り返ります。当時、文通をしていた上野動物園の中里竜二さん（パンダの人工飼育に日本で初めて成功）に聞いてみると、まずは公務員になる必要があると知り、いったんは高校へ進学しますが「違う」と思い、2ヶ月でやめてしまいます。雌の鑑定士になろうと愛知県豊橋市の研究所へ就職しますが、家庭の事情により2年で帰郷。同級生から話を聞いたのをきっかけに現在の仕事（キジの飼育・販売）を始めます。**「そのうち、キジ小屋への道すがら、高齢と病気で作れんことなったので、田んぼをしてくれんやろうかと言われて、いいよぉ～とか言ってしよったら」**現在では1町5反の田んぼを作るまでに。

しかし、機械の入りにくい山間の不便なところにあるなど、あまり効率の良い田んぼではないようです。

「（作るのに苦労したとしても）田んぼは田んぼとしての機能を生かして昔ながらの飯田を維持していくほうがいいと思う。よその人が買って家とかを建てるより・・」

今年、時松さんは、新たなことを始めました。この家を利用した農家民泊です。町内の有機・無農薬栽培グループ「ひこばえ」（時松さんは現会長）などの活動を通じて、マチの人たちと交流し、大事なことを伝えていくことが必要だと感じたからです。

「自然に対する心ちゅうか、今それが欠けているのが自然荒廃の原因ち思うちょるんよね。特に家ね。うちどうが子どもの時には家に家主ちゅうのがおっちょったんよ。ひとつの家でもヘビやねずみが寄り付かん家は栄えんち言うやん。昔は、人間が作った家でも、畳の上は人間、屋根裏はねずみやらイタチやら、軒先はクモん巣やら蜂の巣やらがあって、屋根にはツバメとスズメがおってちゅう、みんなで生活していく気持ちがあったが、今は、屋根裏も床の下もすべて人間のものよね。まずそういう心ちゅうのを変えんとね。そうせんで山に行って自然がいい守らなち言いよって、家に帰れば、夏はクーラーが効いて、冬は暖房が効いて、自然界とはまったく逆のことをしながら、ちゅうのじゃあ自然に対する心は育たない。そういうことを家に来た人に、昔の人の自然に対する心の向き方とかを伝えられればと思う」

▲10月16日・17日は、佐世保からグリーンツーリズム受け入れをしました。

農泊で訪れた人たちには、キジのほかに自家野菜や近所で採れた野草を提供しようと考えています。

「昔は台風にあっても保険もなかったんで、神に障らんようにに質素な生活をして、バチがあたらんようにと、大自然に対して畏敬の念を持って暮らしてきたわね。仏壇に対しても同じ」と農泊をはじめても、仏壇を閉めたり、昔の人の遺影をはずしたりはしません。

「一人一台携帯電話を持って、電話料に高校生でさえ万単位のお金を使う。それについては何も言わない。朝晩のご飯は値段で決めてしまう。ワンパック100円もしないような卵でも人間のために産んでくれよるんじゃない、一羽のひよこになるべく、命をいただきよるのに。それかと思うと、グルメじゃなんじゃ言うて、惜しげものお、お金を使う。本当にアンバランスよね。こんな贅沢をして、バチかぶる。ここは使わなならんお金と、使わんでいいお金、そういったのを考えていかなならんと思うねえ。そういったことを、いちいちお説教するわけじゃないけどマチの人、消費者と一緒になって考えていきたい」

環境を守っていく新たな取り組み・トキゆめプロジェクト。時松さんも中心メンバーとして参加しています。

「これはいいなあと思ったけど、みんなが注目するだけに、これは難しいぞ、ち思うたね」。

しかし、可能であるし、そうしなければならない、と確信もしています。農村が持っていた豊かな生活が消えていくよりも、一足早く消えたトキ。自然との共存関係を元に戻していけば、トキも帰ってくるかもしれないし、昔ながらの人々の営みをアピールしていけば、10年、20年後には、きっといい町になっていくと時松さんは話します。その中心にすえられるのが「農」。

「昔の人はありのままを受け入れてきよったじゃないね。そういう気持ち、ただ生産するだけでなく、人生（人間の生き方）を農業から学んだ。そういったことを伝える町であってほしい。学園都市ではなく、学園農村。そういった農業をすることで、お客さんも増え、永住する人も増えてくる。すぐには効果が出ないだろうけど、長い目で見れば農業を救うことになる」

時松さんはよく「後の世（のち）」という言葉を使います。便利さを追求した結果（国や地方の）借金を増やし、悪い環境と不健康を残してしまうことになった私たちは、「後の世」を担う子どもたちに夢を持ってがんばろう、と言えるようなものを残していく必要があります。

「過去、マチがいい、百姓はつまらんと言うてきたことが衰退の第一歩じゃきたな。子どもたちにもこういう話をしよるんよ。俺たちの住んじょる九重町は日本一いい町なんぞ。よそんしがゼニ使うて見に来る硫黄山の煙がタダで見らるる、名水百選が毎日飲まれて、香りの百選の空気が毎日吸われていいのお。食う米はあるし、野菜はあるし、風呂は地から沸いてくるし。じゃきの、田舎はゼニがねえでん暮らしていける。都会んしは、ゼニがねえと生活できんから、あげあくせく働きよるんぞ。日本全国んしは、飯田高原に住みたいと思うちょるけんど、しょうがないけん、都会に住んじょるんぞ、ちね。そういうようなこと言うて20年育てたら。大きい結果が出ると思う。教育は重要」

一日で一番好きな時間帯はいつですかと聞いたとき、時松さんは即座に。

「やっぱ夕方じゃね。自分方やから寂しないんじゃろうね。異国の夕焼けちゅうのはどんこん、かいと寂しゅなるんよね」

農村風景が一番映える時間帯は夕方。確かな生活をその中に感じるからこそ、「かいと寂びしくなく」豊かに映えると言えます。

農村は復活し始めています。

百姓の生活を守れば、（自然は）守らんでん、守られていく。

近頃グリーン・ツーリズムが元気です

いよいよ農山村の時代がやってくる

9月10日、小国町の「(財)学びやの里」事務局長の江藤韮重(くにしげ)さんの講演会「ツーリズムとまちづくり」が保健センターでありました。江藤さんは、地元での農業の傍ら、タウン誌発行などの活動を行い、小国町のまちづくりに手腕を発揮。現在も九州ツーリズム大学の事務局長や熊本大学非常勤講師などで活躍しています。

講演会には、町内でグリーン・ツーリズムに取り組んでいる人や認定農業者・生活改善グループなど約50人が参加。江藤さんは、小国町での取り組みを講演。「田舎の人が『あんなところが・・・』という所こそ都会の人が行きたいところ。いろいろなタイプがあってよいと思うが、体験のない、かまわないツーリズムが人気を集めている」現状を説明。「直売所を設けたことにより高齢者の社会参加が進み医療費の削減が進んだ」ことや「農家と商店街との連携ができた」などの事例を紹介、「若い世代がツーリズムに関心を示している。小国も九重も福岡市から2時間圏内にあるなど、非常に条件の良い位置にある。日本を代表するグリーン・ツーリズム地帯になる可能性が十分にある」としました。

10月15日、グリーン・ツーリズムによる農家民泊営業許可書が新たに11人に交付され、町内で同許可を受けたのが全部で15人になりました。

平成14年度より農泊の営業許可を大幅に緩和する独自の方針が大分県から出されたことなどをきっかけに、農泊に取り組む人が増加。九重町では、ホテル・旅館・民宿が多くあることから、これら業者と共存できるよう九重町長とグリーン・ツーリズム研究会（平成12年度発足）会長の推薦が必要となっています。
同研究会ではグリーン・ツーリズムを「ふるさとを持たなかったり農業に縁がなかったりする子どもたちへの教育の場」としても活用する方針を出し、新たに11人への営業許可証交付となりました。

交付式では、今回許可を受ける11人が思い思いの屋号を登録し参加。坂本町長は「いい屋号に負けないようにがんばってほしい」と述べ、同研究会会長の安達道康さん（竜門）も「大もうけはできないが、人もうけはできる。人と人とのふれあいを大事にしてほしい」と激励しました。また、今回の認定者を代表し、時松和弘さん（中村上）が「訪れる人に農業のすばらしさ、町のすばらしさを伝えたい。ただ生産するだけの農家でなく、新しい分野を開拓し、新たな農業のさきがけになりたい」と決意表明をしました。

農業のすばらしさを伝える

▲許可証を手に

グリーン・ツーリズム～都市部の人々が、ふるさとのやすらぎを求めて農山漁村を訪れ、その自然や文化にふれながら、農林業の体験や人々との交流をする「新しいタイプの旅」のこと。

地球最後の木を探索

高20メートルを超える高木になります。

9月23日、「別府生物友の会」による「飯田高原の自然を探る会」が行われ、地球上で九重町と久住高原の一部にだけ生息するというツクシボダイジュ（地元ではヘラの木と呼ぶ→2ページ参照）の観察を行いましました。同会の約30人のほか地元から渡辺格雄さん（8ページ参照）、時松和弘さん（12ページ参照）も参加。同会会長の荒金正憲さん（野生植物研究家）の解説により奥郷・蕨原（わらびはら）に生息するツクシボダイジュを観察。木の高さや幹の太さなどを計測したほか、実際にこの木を利用して綱を作っていたという森忠雄さん（奥郷）の話を聞きました。成長が早く、人々の生活と密着していたこの木について、時松和弘さんは「大事にしていかなければならないのはもちろんだが、文化でもある。来年は昔ながらの方法でこの木から綱を作ってみたい」と話していました。

▲中心にいるのが荒金正憲さん

広がれ、トキのゆめ

「トキのゆめ」が地域へ広がっています。

11月5日、飯田中学校生徒（66人）を対象にした、NPO法人「九重トキゆめプロジェクト21」のみなさんによる講演会が行われました。

同校では、地域づくりなどに取り組む地元住民の話を生徒が聞くことで「地域の良さを見直すこと」や「意欲を高めること」をねらいとした「ふれあい集会」を毎年開催しています。また、環境問題への取り組みに力を入れていることもあり、子ども達への環境教育を計画している「ゆめプロジェクト」と考えが一致。この日の集会が実現しました。

集会では、同プロジェクト代表の高橋裕二郎さん、同副代表の杉浦嘉雄さんと時松和弘さんなどが教壇に立ち、トキを題材に、このプロジェクトや地域への思いを生徒に話しました。
ほとんどの生徒が初めて見聞きするトキに興味津々。熱心に話を聞く姿から「トキのゆめ」が広がっている様子がうかがえました。

同プロジェクトは12月に飯田小学校、さらには老人会などにも話をしながら取り組みの輪を広げていきたいと話していました。

▼講演する時松さん

住民のやる気次第でトキは帰ってくる

5月15日、日本文理大学開学祭特別講演会「幻の鳥・トキ、大分のあおぞらへ羽ばたく夢」が行われ、同大学客員教授・蘇雲山さんによる基調講演、NPO法人「九重トキゆめプロジェクト21」理事長の高橋裕二郎さんと蘇さんとの対談が行われました。

基調講演「中国から学ぶ“トキのすめるまちづくり”」で、蘇さんはトキの生態やかかわってきた活動などを紹介した上で、「餌場の確保（農薬・化学肥料規制）やヒナの保護など“生息できる環境”を作っていく上で何より大事なのは地域住民の協力。そうすればトキを呼び戻すことも決して夢ではない」と話しました。

続けて行われた蘇さんと高橋さんの対談では、まず飯田高原を中心とした地域づくりや、トキをめぐる活動を紹介。その後は、環境についての話が中心となりました。高橋さんは「一番上流に住んでいる私たちが水を汚さないようにすれば、下流も汚れない。そこから始めれば全体が良くなる。そのときトキが帰ってくる」と話せば、蘇さんも「21世紀は環境修復の世紀。そのためには地元住民の参加が一番大事。住民のやる気しだいでトキは帰ってくる」とトキゆめプロジェクトへエールを送りました。

▲左から高橋さん、蘇さん

▲会場は満員に

素敵な生活

自らの生活を豊かにすることからもまちづくりは始まる

「田舎暮らし」という実験

三奈木 朗さん

大阪で会社員をしていた三奈木朗さんが妻の良子さん、息子の惣太くんとともに九重町へ移住してきたのが5年前。

大阪にいた頃の仕事は写真の現像。仕事は面白くて好きだったと言いますが、1日中暗闇の中で太陽を浴びるのは昼休みだけ。いつも近くの公園に出かけ、木や鳥を眺めていました。そんな、つかの間の自然に触れたとき、自分たちの生活がいかに不自然かをものすごく感じたと三奈木さんは振り返ります。環境や教育、平和、さまざまな問題が私たちの身の回りに満まいています。この"不自然な"問題に自分はどう対峙すべきか、三奈木さんは考え続けました。

「大阪にいた頃は今よりもっと危機感を持っていました。とにかく大量消費、経済優先の今の生活では地球が持たないと思ったんですよ。子どもが育っていくのに不安だ。だから世の中を変えよう、というのではなく、自分がどこまで出来るのか考え、実践することで、自分たちの暮らしが成り立って、それが徐々に広まっていけばと考えました」

日々の生活の中から問題に取り組んでいく。そのためには、まずは、自分で食べるものはなるべく自分で作ろうと、当時0％だった自給率をあげることを考え始めます。そして田舎暮らしへ。

三奈木さんは自らの田舎暮らしを実験と称します。

移住後始めた農業で、今では自給率も約70％に。味噌や梅干しも自家製。生活全般を見直したとき、昔の生活に近いものをめざすのがよいと感じています。

「もちろん、頭で考えるようにはうまくいかないことも多いです。そこで頑なにオレはこうしなければならないと思うとつらくなるんです。融通を利かせることも大事だと思えるようになったのも、田舎に来て変わったことかな。たとえば、大阪にいた頃は、すべてが計画的だったんですよ。時間の割り振りをしっかりするとか。その癖が抜けきれなくて、スケジュールをきっちり立てて畑を作っていたら重荷になってうまくいかなかったんですよ。それをやめて、畑に行ってやることを決めるようにしたら、楽になったし、うまくやれるようになりました」

うまくいかなかったのは畑作りだけではありません。最初のうちは田舎暮らしに対する良いイメージが先行していたと話します。テレビや雑誌などで取り上げられる田舎暮らしは美化しすぎるとも。

「田舎は田舎で、たくさんの問題があります。でもそれは"正しい問題"だと思うんです。家の中がカビたとか・・・。それに人間って機械じゃなくて精神的なものを持っているんだから計算どおりいかないじゃないですか。たまには気晴らしが必要だというときもありますね。そんなときは思いっきり気晴らしをします」

ただ、のんびりと田舎暮らしを過ごしているかと、そういうわけでもないようです。とにかく忙しい、やることがたくさんあると、三奈木さんはこぼします。しかし、**「ストレスにはならない忙しさだ」**と。妻の良子さん（右ページ写真まん中）は友人の二田潤子さん（同写真左）とパン工房「2×3＝6（にさんがろく）」を始め、つい最近店頭販売を始めました。移住のとき2歳だった惣太くんも現在は小学校2年生。楽しい学校生活を過ごしています。

「九重町に暮らし
（ココくら）」とい
フリーペーパーを
発行。さまざまな
題を日々の生活か
考えています。

「とにかくやってみることが大事。たまに好奇の目で見られることはありますが、やっていることに満足感はあります。でも、必要なものを、必要なときに、必要なだけというのは、大事なんじゃないかな。活性化、活性化、はもういいんじゃないかと。それが素敵に見えればいいけど、すさんで見えることもあるかもしれませんね（笑）」

三奈木さんの"田舎暮らし"実験は続いています。

「素敵な暮らし？・・・・・環境などの社会の問題が極力クリアされて、平和で健康的な暮らし。しかも楽しい、かな」

田舎暮らしを素敵にする風

柴田敏郎さん

「ここは西日本一の道」

バイク乗りたちは、やまなみハイウエーのことをそう呼んでいます。盛んに車が行き交う道、そこから50メートルほど道沿いに入ると、うそのように車の音が聞こえなくなります。代わりに聞こえてくるのは、鳥や虫、風の音。そこに「あるがまま舎」があります。

九重町に移住してきた吉岡正美さん（舎長）と柴田敏郎さん（舎員）の二人によって作られた「あるがまま舎」。一言で言えば交流空間。喫茶部門を作ったり、コンサートを行ったりと誰もが自由に出入りができ、楽しく過ごすことができる雰囲気づくりをしています。「地球風」というフリーペーパーの発信基地もここ。

取材で訪れた日も、数人がここを訪れ、パンづくりをしていました。その写真を撮っていると背後で「こんにちはー」という声が。自分で作った野菜を売りに若い女性が元気に登場。一層賑やかな雰囲気になります。

柴田敏郎さんは、午後の作業の合間のお茶を飲みながら『人が楽しそうにしているのを見るのがうれしいんですよ』。

柴田さんは京都府出身。大学浪人時代の"ぼくの叔父さん"体験が今の生活のルーツだと話します。今から20年ほど前の話。

「その叔父さんというのが、とにかくいろんな話をしてくれました。それで、これからは土をいじって太陽の下でする仕事が良い、農的生活をめざすべきだと言われ、それがずっと頭の中に残っていました」

大学卒業後は、有名農機具メーカーへ就職。しかし、「農的生活」から離れていく仕事内容などに疑問を持ち、7年8ヶ月で退社します。その後、先にやめた会社時代の同僚から声をかけられ、特別栽培米販売にたずさわり、その事業拡大で東京・吉祥寺のアンテナショップをまかされることに。その店の前で「あれやこれや」という古道具屋を開いていたのが、「あるがまま舎」の相棒・吉岡正美さん。

「一緒に酒を飲むようになって、何となく田舎暮らしの話で盛り上がりまして。それで、田舎暮らしをしようと、吉岡さんと二人で東京近郊から探し始めて、だんだん南下していったんですよ」

そして九州へ。地図を見ていて、山の中にありながら交通の便がよさそうだと目に止まったのが九重町。

「男二人組じゃないですか。普通怪しみますよね（笑）。でも、何にも聞かれなくて、担当の人が気持ちよく家を紹介してくれたんですよ。受け入れ環境も整っていた。それが九重町に決めた一番の理由です」

最初は、空き家を借りて住みます。

「住みやすかったです。近所の人は変に干渉しないし、でも良くしてくれたんですよ。仕事も紹介してもらえたし、地区内のことで無理強いされることもなかったです。窮屈さを感じずに、自然といい関係ができてきました」

九重町に暮らし始めて6年。

「変わったことですか？　だんだん忙しくなりました。ただし、都会の時のように、追われて、忙しいのではなく、自分から、忙しくしているというか、忙しくしたくてしている。人が本来持っているエネルギーでもって忙しくしている、という感じですね」と話す柴田さんが現在、忙しく、取り組んでいるのが家づくり。移住後に木工の技術は身につけたものの、大工知識はゼロ。昨年10月から「あるがまま舎」横の広場に6坪の家を自分の手で「100万円で家が建てられる本」をテキストに建設中。今年の冬までには

眺めのいい家

南 光洋さん

麻生釣にたったひとりで家づくりをしている人がいると聞いて、さっそくお伺いしました。

コールタールで黒くなった壁が周囲に良くとけ込んでいます。この家をつくっているのが南光洋さん。奈良県生まれの南さん、熊本市でコックの仕事をするうち、田舎暮らしをしながら自分で家を建ててみたいと思い始めます。約10年前のことです。その後小国町に移り住み、ふとしたことで麻生釣の土地をみつけます。しかし、コンクリートをどこから入手すればよいのかさえわからない状態。大工経験はゼロ。

「自分一人で出来るものか、大工さんに聞いてみたんですよ。もしはっきり『出来ない』って言われていたらやめていたと思います」

それから2年半。だいぶ家の形が見えてきました。基礎と棟上げのときは大工さんに手伝ってもらったものの、あとはほぼ一人。なかなかの出来映えに「やれば出来るもんですね」と満足げな様子。まだ完成していないのではっきりしませんが、コストも国産の大衆車程度と、通常の家に比べてグンと安く仕上がる予定です。

「安くならなきゃ、やってられません。楽しい部分はすぐに去ってしまいます。ひとつの工程が終わっても、ほっと一息する間もなく、次の工程にかからないといけない」

通常の家づくりは、出来るまでが楽しいと言いますが、**「楽しみといえば、やっぱり出来てからかな」**と話す南さんの家づくりは逆のパターン。

「修理することを前提としているので、家の完成が即修理のスタートですね」。

「棟上げのときに、こんな大きな家をつくっているのかってびっくりしました」と話すとおり、最初はもっと小さい家をつくるはずでしたが、家族の要望を入れていくうちに、木造2階建て延べ約40坪の広さに。南さんの妻シャーメインさん（イギリス出身）は、ケーキの店をやってみたいと話しているそうです。そう言えば、外観を見ると、どことなくイギリスの田園住宅風。窓の金具はイギリスから持ち帰りました。南さんもそのつもりのようでしたが、シャーメインさんからは一言「イギリスは煉瓦づくり」。

年内完成を目指して作業を急ぐ毎日が続いています。

「家をつくる前は、新築の家を見て、なぜあんなつくりや色なんだろうと思うことが多かったんですよ。でも自分でつくり始めて、そうなる必然性みたいなものがあるというのがわかりました。モノをつくるというのは、その人の考え方や思想が現れてくると思うんですよ。自己表現ですね。家には特に目立って出てくる。自分で家を建てようという人がもっと増えるといいんですけどね」

南さんの手でひとつひとつ積み重ねられていく工程。それは南さんの思想の積み重ねとも言えそうです。

その家は、2階から阿蘇山が見える、眺めのいい家です。

完成の予定です。

仲間2人と米や畑を作る「農的生活」も実践中です。なるべく自給自足でと考えていますが、気張らず、あるがままに。

「自給自足って言うと、1から10まで自分でやるっていうイメージがあるじゃないですか。でも、みんな得意・不得意がありますよね。だから、いろんな人が出入りし、助け合うことで自給自足というのは成り立つものだし、人間社会ってそうやって発達してきたものだと思います。田舎だからこそ、そうした自給自足の生活が可能かなあと思うし、都会から人が来て、交流していくことで補充しあえることもあると思います」

ただ「自分の食べ物は自分で」という個人レベルで自給自足をとらえるだけでなく、そこから、たとえば国と国との間へ意識を広げることで、環境や平和の問題が見えてくることがある・・「あるがまま舎」の発行するフリーペーパー「地球風」というタイトルにはそんな意味が込められているような気がします。

田舎の、草むらにぽつんと建つ「あるがまま舎」。しかし、そこには人と人との交流から生まれるさまざまな風が吹き、とてもにぎやか。

この風が田舎暮らしを素敵にしています。

月の輝く夜に

お気に入りのイスを持ち寄って、一緒に夜空を眺めよう。そんな素敵なこころみが野矢地区で生まれ、若い人たちの間で行われています。ルールは、ひとつ―自分のお気に入りのイスを持ってくること。ここでついた名前が「マイチェア会」。約1年半前から行われているマイチェア会、中心となっているのが今村智彦さん、佐藤智之さん（写上）。

「以前から一緒に家の中でテレビを見ながらのんびりしてたんですけど、せっかくなら外で」とイスを持ち出して屋外へ。思いのほか充実した時間を過ごせることを発見。現在では、15人ほどでマイチェア会を開いています。お気に入りのポイントは3カ所。どこも地元の人しか知らない、とびきり景色が良いところです。満月か新月の夜に開くことが多いそうです。

「最初はワインでしたが、いつのまにかビールとおつまみになってしまいました（笑）」と村さん。サンマを焼いて食べたこともあります。経費はひとり500円もあれば十分。ポテトチップだけのときもありますが、贅沢な時間であることに変わりはありません。しかも、気軽に出来ることは大きな魅力。うまくするコツは「入念に準備するのは抜きにして、思ったらすぐに実行」だそう。

「のんべんだらりとしたもんですよ」と言い[illegible]がテントを持ち込んで、泊まったこともあるし、人生について語り合った夜もあります。

「自分たちは、小さい頃から一緒に山とかで遊んでいたし、その頃とあまり変わりないと思うんですよ。その延長で、自然がいっぱいの中で一緒に遊ぼうよ、って感じですね」と話す会の人たち、自然の美しさを改めて感じると話していました。

月の輝く夜、星のきれいな夜の語らいは遅くまで続いています。

8月30日は4人でマイチェア会。すっきりとした満月が印象的な夜でした。

古いものをうまく生かし、素敵な生活

古後 秀憲さん

◀蔵のそばには、少なくとも樹齢200年以上にはなるカゴノキがあります。

国道２１０号線から少し入ったところにその蔵は佇んでいます。

少なくとも築２００年以上にはなると言われるその建物、外見はいかにも月日の流れを感じさせるものですが、一歩中に入ると、なんともおしゃれな空間が出現。窓がないため、昼間もほとんど日が差し込まない内部は、間接照明のやわらかい光に満たされ、外界とはまた違った、ゆったりとした時間が流れているようです。

この蔵を改造したのが古後秀憲さん。

普段は福岡市でＣＭ撮影の仕事をしている古後さん、時間を気にせず、友だちとゆっくり過ごせる場所がほしいと注目したのが粟野本村にある自宅の蔵。**「せっかく場所があるんだから都会生活で出来ないことをしなければもったいない」**と、内部をプライベートルームに改造することを思い立ちます。早速2月下旬から休みの日を利用した改造を始めますが、何しろ築２００年以上にはなるという蔵、片づけが大変。年代モノのほこりとの格闘がまず待っていました。軽トラ4台分のゴミの処分も大変だったと話します。その上で友だちの手を借りながら工事を進め、完成したのが5月上旬。かかった経費は約40万。

「改造前の写真と改造後の写真を見比べるとびっくりすると思いますよ」という蔵の内部。あえて形の違うソファや、間接照明に凝るなどの工夫をしてみました。コンセプトはアメリカのすしバー風。確かに部屋の一角に畳敷きコーナーがあったり、竹を利用した照明があったりするなど、どことなくオリエンタル（東洋的）な雰囲気が漂っています。それとともに、照明や家具・小物に赤色が印象的なものが多く、「昭和のバー」風とも。

取材に訪れた日は、福岡市や地元から6人が集まっていました。この蔵の存在を耳にし、兵庫から訪れたという女性もひと目で気に入ったようです。

「初めて来たのに、いきなりくつろいでしまいました。癒されますね。遠くからでもまた来たいです」。

「（蔵を改造して）田舎を見直しました。それにバランスが必要だなあって。仕事とゆっくり休むことの」と話す古後さん。冬の間は閉めたいそうですが、「とても寒いかもしれないけど、蔵の存在があったかい。すごく友だちとかの愛情が入っているからかな」といった声に押されて開けることになりそう。すっかり週末の憩い所となってしまいました。

この蔵で、青の気配を感じる日もすぐそこです。

▼赤いやかんに赤い照明

▲赤いスタンドチェア、リサイクルショップで１脚1,000円で購入

▲カウンターに立つ２人の右側が古後さん

インフルエンザ、かかるまえにまず予防！

保健

今年もインフルエンザの季節がやってきます。
インフルエンザは肺炎などの合併症を起こす危険性が高い病気です。
流行する前に予防しましょう！

予防のために必要なことは？

- 人ごみに行くのをさける
- 手洗いとうがいを心がける
- かかった人はなるべく外出しないようにする
- 十分な栄養と休養をとる
- 室内の乾燥に気をつける
- マスクを着用する
- 流行の1ヶ月前くらい（11月～12月）にインフルエンザワクチンの接種を受ける

高齢者インフルエンザ定期予防接種のお知らせ

対象者　①65歳以上の人
②60歳以上65歳未満の人であって、心臓、腎臓もしくは呼吸器等の障害を有する人（かかりつけの医師にご相談ください）

接種期間　平成16年12月28日まで

接種回数　1回

接種費用　1,000円（個人負担）

接種場所　玖珠郡内の医療機関

①②以外の人で予防接種を受けたい人は主治医に相談しましょう。

風しんが流行しています！風しんの予防接種を受けましょう

風しんはなぜこわい？

妊娠初期に胎児が風しんウイルスに感染すると、先天性心疾患、白内障、難聴を特徴とする「先天性風しん症候群」を発症する場合があります。最近は年間1例のみの発生でしたが、平成16年に入って、7月末現在、全国で5件発生しています。風しんは昨年から少しずつ流行していて、特に10歳以上の人の割合が増加しています。20～30歳代の、風しんに対する免疫を持たない人は推計530万人（うち女性は78万人）であり、妊婦の風しん感染が心配されます。この流行は、今後数年は続くであろうと予想されています。

先天性風しん症候群の発生防止のためには風しんの予防が必要です。一人ひとりが風しんにかからないよう予防接種を受け、生まれてくる赤ちゃんの健康を守りましょう。

次の人については特に予防接種を受けることが望ましいと考えられています。①の対象者については定期予防接種になりますので、無料で医療機関にて接種できます。②③④にあてはまる対象者については任意予防接種になりますので、医療機関にご相談のうえ、有料にて接種し、風しんを予防しましょう。

対象者

① 生後12ヶ月～90ヶ月未満のお子さん
② 妊婦の夫、子ども及びその他の同居家族
③ 10歳代後半から40代の女性（特に妊娠希望者または妊娠する可能性の高い人）。妊娠していないことを確認して、接種後2ヶ月間の避妊が望ましい
④ 産褥早期の女性のうち、(3)明らかに風しんの既往、(3)予防接種歴、(3)抗体陽性確認がある、のいずれにもあてはまらない人。

妊婦さんへ

風しんになったら必ずしも「先天性風しん症候群」の発生を意味するものではありませんが、抗体価を検査してもらうなど主治医に相談しましょう。

予防接種に関するお問い合わせ先　保健センター（☎ 76－3838）

教育委員会だより

九重町立東飯田中学校

東飯田中学校は、

（知）　将来に生きてはたらく基礎的な学力をしっかりと身につけた生徒の育成

（徳）　相手の立場にたって考え行動できる、心豊かで思いやりのある生徒の育成

（体）　柔軟で粘り強い、たくましい気力と体力を持った生徒の育成

・・・・　を、めざしています。

本校の特色

（1）　生徒・保護者・教職員及び地域との連携　・・・「子どもは地域で育つ」

＊毎月15日の学校開放日、本校のすべての活動を公開しています。

＊本年度、県（地域と育む学習力向上モデル事業）及び町の指定を受け、「学習サポーター」を活用しての学校づくりを研究しています。

＊ＰＴＡを中心に、学習会（人権・進路）や講演会・研修会あるいはレクレーション等を行いながら、保護者・教職員も、学習を積み重ねています。

（2）　基礎学力の充実　・・・毎時間毎時間を大切にする授業づくりのために。

＊ＴＴ、ノート指導、少人数集団による個に応じたきめ細かな指導

＊チャイム席・私語・提出物・聞く話す態度等、規律を大切にする授業づくり

＊課題や努力ノートによる計画的・自主的家庭学習の推進

＊朝読書・朝自習の時間を活用しての学習環境づくり

（3）　自治活動の推進

＊１年（文化・図書部、保健体育部）、２年（生活部、環境整備部）、３年生（人権・学習部、奉仕部）等、学級専門部制による生徒会活動の推進。

＊生徒会執行部及び実行委員会を中心とする全校生徒での、体育祭や平和集会等への積極的な取り組み

（4）　人権・同和教育の推進

＊あらゆる場を通して、学習を重ね、部落差別・ハンセン病元患者・外国人等への不合理な差別の解消に向けた意欲と行動力を身につける。

＊生徒会の中に組織された実行委員会等を通して、人権学習強化月間や平和集会その他の場で、その学習成果を発表する。

（5）「生きる力」を育むための「総合的な学習の時間」の実践

１年　農業（梨づくり・大豆の栽培・豆腐づくり）体験、職場体験

２年　ボランティア活動・学旅行レポート発表、職業調べ

３年　進路学習　職場体験

中心となって活躍した３年生
戦い終わってシンボル画の前で「はい ポーズ」（体育祭にて）

こちら119番

消防自動車等の緊急走行に対する理解と協力を！

消防車や緊急車は、一刻も早く火災などの災害現場に急行して消火活動を行ったり、また救急処置を行ない、速やかに病院へ搬送しなければなりません。

このため消防車両等は、緊急時に迅速に通行するため、道路交通法では「緊急自動車」として、一般の車両よりも優先して走行することが認められています。

消防自動車等の円滑な緊急走行のためにみなさん一人ひとりのご理解とご協力をお願いします。

★サイレンを鳴らして接近してきた場合は、一般車両は通路を譲ってください。

★交差点付近では、交差点を避け、道路の左側によって一時停止してください。

★高速道路などで本線に入ろうとしている時は、これを妨げないようにしてください。

★緊急走行時にサイレンを鳴らすことは、法令で義務づけられています。

夜間の緊急走行時のサイレン音に対し付近のみなさんのご理解をお願いします。

図書館だより

ほんの森 11月号

図書館開館時間
平　日　10:00～18:00
土・日　 9:00～17:00
月・祝　休　み

図書館で漫画について考えた

「子どもが漫画ばかり読んで、本を読まない！」「図書館には漫画を置かないほうがいい」こんな意見を時々耳にします。確かに、子どもの頃から漫画“しか”読まず、本には全く興味がないというのは、もったいないし残念なことだと思います。しかし、だからといって漫画そのものを否定するのは…それこそ残念な気がするのです。

最近、図書館で『火の鳥』『どんぐりの家』『聖（さとし）』、『光とともに…。』など、児童書・一般書共に漫画を購入しました。『火の鳥』はみなさんもおなじみの手塚治虫の名作ですが、後の3作は偶然にも病気や障害を持った人々をテーマにした作品です。どれも子どもから大人まで大好評で、中には予約が入るものもあります。そこでふと思いました。もしこの<デリケートで重いテーマ>が<活字のみ>だったらと。はたして難しい病名や症状の様子など、活字だけで子ども達が理解し、思い描けるでしょうか？大人でも想像するのが難しいと思います。

漫画に対して抵抗がある人もない人も、ぜひ一度図書館へどうぞ。子ども達やお孫さんと一緒に読んで、感想を言い合える漫画がきっとあると思いますよ。

新着本

《児童書》

聖（さとし）1～9　（コミックス）	山本おさむ
どんぐりの家　第1～7巻　（コミックス）	山本おさむ
ライオンボーイ　1巻・2巻	ジズー・コーダー
声に出して読みたい日本語1　子ども版	齋藤孝
パンダコパンダ	宮崎駿

《一般書》

十津川警部「故郷」	西村京太郎
出口のない海	横山秀夫
純白の証明	森村誠一
真夜中の神話	真保裕一
幻覚	渡辺淳一
ただのナマズと思うなよ	椎名誠
九一歳の人生論	日野原重明
ホテリアー　上・下	カン・ウンギョン
イマジネーション	赤川次郎
どうもいたしません	壇ふみ
むかし、みんな軍国少年だった	石永淳（他）
あさ／朝	谷川俊太郎
母に敬う子守唄　ーあたしの介護日誌ー	落合恵子
戦争のつくりかた	りぼん・ぷろじぇくと
ＪＦＫ暗殺　ー40年目の衝撃の証言ー	ウィリアム・レモン
世にも奇妙な職業案内	ナンシー・リカシフ
遍路と巡礼の社会学	佐藤久光
大人のための湯布院こだわりガイドブック	博多調査堂
マイホームの税金・法律便利事典	小澤吉徳
パーキンソン病最新治療と生活法	健康ライブラリー
水田の多面的利用	農山漁村文化協会

《ビデオ》

リロ・アンド・ステッチ　吹替え版	ディズニー
ライオン・キング　ースペシャルエディションー	ディズニー
ロード・オブ・ザ・リング　～二つの塔～　前編・後編	ピーター・ジャクソン

知識のユニバース“放送大学”

テレビ・ラジオを利用して授業を行い、マイペースで学習ができる正規の大学です。入学試験はありません。約300科目の幅広い分野の科目をそろえています。

出願期間
平成16年12月15日（水）～平成17年2月28日（月）

視聴方法、特長、学費等の詳しいことは次のところまでお問い合わせください。「募集要項」（無料配布中）等をご送付します。

放送大学大分学習センター
TEL. 097－549－6612　FAX. 097－549－6621
〒870－0868　大分市野田380
（別府大学大分キャンパス内）
放送大学ホームページ　http://www.u-air.ac.jp/hp

県民体育大会スキー競技会に向けての選手選考会

日　時　12月23日（祝）午前9時～（インスペクション→競技）　＊天候により変更あり
場　所　九重森林公園スキー場
問い合わせ　☎76－3802（役場保健福祉課　穴井）

第4回　ここのえ町から平和を願うアコースティックコンサート

さわやかな歌声とともに平和についてちょっとだけ考えてみませんか・・・。

と　き　2004年11月23日(祝)　午後1時30分～（開場：午後1時）
ところ　九重文化センター2階大会議室
協力金　開場使用料＋資料代として500円
出演は5組。問い合わせは、やまもとメディカルフィットネス研究所（☎78－8682）

交通安全

平成16年町内地区別事故発生状況（累計、発地）

地区別	人身事故 死者	負傷者	件数	物損事故	件数計
東飯田	0	7	7	36	43
野　上	0	13	11	49	59
飯　田	0	30	22	145	167
南山田	1	22	13	61	74
計	1	72	52	291	343

（平成16年10月末現在）

まちの話題

2度びっくり

「今が一番幸せです」

そう話すのは江藤鹿永さん（川西）。年齢を聞いてまずびっくり。大正2年生まれの91歳。とてもその年齢には見えません。元気の秘訣は、歩くことを心がける、そして多彩な趣味を持つこと。詩吟、大正琴などなど・・・。特に最近楽しみなのが4、5年前からはじめたという刺繍。月3回、南山田公民館で開かれる教室には欠かさず参加しています。先日も、同公民館へ出来上がった作品を寄付したばかり。キッチン用品や野菜果物などがきれいに並べられたかわいらしい作品で制作期間は約2ヶ月。「2004 SIKAE ETO」のサイン入りです。

「みなさんのおかげで元気に過ごすことができます。少しでもお返しができたら」話す江藤さん。昨年は坂本町長にクッションをプレゼント（写真）。「町長の還暦のお祝いになりました」と笑顔で話していました。江藤さんの元気さ、作品のすばらしさに2度びっくりです。

▶教室の先生、生徒と一緒に

11月のハート降る♥ここのえ

心温まるお話 ♥♥♥♥♥

山々の木々が赤く色づきはじめ、町内にも県外ナンバーの自動車が目立ちはじめると、秋の行楽シーズンの訪れを感じます。九重町の自然に触れ、癒しのひとときをゆっくり味わっていただけたらと願う思いです。さて、今月の心温まる話はふたつです。ひとつは「孫を思う祖父への思い」を、もうひとつは「担任の子どもへの思い」が書かれています。

父の写真 ♥♥♥♥ 匿名希望

私の父は、82歳。母が亡くなりひとりでがんばっています。離れているため、なかなか会えませんが、子どもの学校行事である中学校の体育祭によろこんで来てくれました。子どもが3年生なので最後の体育祭、「おじいちゃんもがんばるよ」・・というのもずっと3年間来て、写真を撮ってくれています。生まれてからずっと成長を撮りアルバムに記録してくれています。すばらしいのは、孫9人全員分のアルバムがあること。感謝、感謝です。体育祭で敬老席に座っていると「おたくは、よく来ていただいていますね」と声をかけていただいたみたいです。「先生みたいだったよ。覚えていてくれたんかな」と、とてもうれしそうでした。父の体育祭も終わりました。声かけをしていただいた先生に感謝いたします。ありがとうございました。

後日、父より写真が届きました。

子どものさわやかな笑顔がそこにありました。写っている子どもたちに渡してと、何枚も何枚も焼き増しをしていました。あたたかい気持ちになりました。〝ありがとう〟と父に伝えました。感謝の気持ちでいっぱいになりました。

希望のスタート ♥♥♥♥ 匿名希望

高校3年の子どもの三者面談があり、子どもと一緒に緊張しながら学校に行った。進学を希望している子どもは、先生と真剣に話し、先生も真剣に聞いてくれた。ひとつひとつ丁寧に質問し、答える子どもの目を見ながらうなずき、また質問する。子どもの意志を尊重する姿、否定せず確認している対話、とても信頼感があり心が落ち着いた。そして、先生が子どもに言ったことばに感動した。「おまえの思うようにがんばってみろ。おまえなら出来る。先生の出来ることは、なんでもする」「おまえが、おれのクラスで本当によかった」・・・子どもは、とてもうれしそうだった。受験を前に不安でいっぱいの時期、心からの激励に元気が出たようだった。不安と緊張の三者面談が希望のスタートになった。

今月も締め切りに何とか間に合いました。少しずつこの取り組みも軌道に乗ってきましたが、なかなかお話が投稿されません。伝えたい話はあるが、文章で表すのは苦手であるという方もいらっしゃるかもしれません。そのような方はお話だけでもけっこうです。ハート降るここのえにご連絡ください。メンバーが直接お話を伺いにまいります。

連絡先　佐藤明郎（☎76－2526）

くらしの情報

消費税及び地方消費税の納付内期限

納税は社会の基本的なルールです。特に消費税及び地方消費税は、消費者からの「預かり金的な性格」を有する税金ですから、日ごろから納税のための資金の備蓄につとめ、期限内に確実に納付してください。期限内に納付されない場合は延滞税もあわせて納付しなければならなくなりますし、督促を受けても納付しない場合は財産の差し押さえを受けることもあります。期限内に納付できない事情があるときは、早めにご相談ください。

大分税務相談室（☎ 097－532－7319）

県立盲学校巡回教育相談

相談対象者　乳幼児から成人まで年齢不問。目の見え方でお悩みの方。相談内容は、視覚障害教育に関すること。

相談日時　11月25日（木）10：30～15：00

相談場所　大分県中津教育事務所２階（中津市中央町１丁目５－１６）
相談料は無料です。

連絡先　大分県立盲学校（☎097－532－2638）

平成17年度町立保育所・幼稚園入園申し込み受付について

保育所入所資格

町内に居住し、就学前（満５歳まで）の乳幼児で、家庭において保育に欠ける（保護者が労働に従事したり病気などの理由で家庭において十分に保育することができない）乳幼児。

幼稚園入園資格

① 町内の区域内に居住または町外者で、設置者が特に入園が必要と認めた幼児。

②（満４歳に達した翌日以後最初の）学年の初めから小学校就学の始期に達するまで（満４・５歳）の幼児。

受付期間　平成16年12月１日（水）～12月20日（月）

受付場所・問い合わせ先

役場幼児教育課	☎７６－３８２８
木の芽保育園（東飯田）	☎７６－２３９４
木の葉保育園（野上）	☎７７－６４４１
木の花保育園（飯田）	☎７９－３７００
木の実保育園（南山田）	☎７８－９４３１
東飯田幼稚園	☎７６－３０６７
野上幼稚園	☎７７－６９０４
飯田幼稚園	☎７９－２３５１
明倫幼稚園	☎７８－８６３６

＊申込書は上記受付場所で11月25日から用意しています。

平成17年度「青年長期ボランティア計画」参加者募集

参加者は約１年間、日本各地の教育、福祉などに関わる団体や機関に派遣され、活動を行います。参加期間中は住居や食事が提供されます。対象は18歳～30歳の男女で、資格経験は問いません。締め切りは12月10日（金）。詳しいお問い合わせは(社)日本青年奉仕協会（☎03－3460－0211　http://www.jyva.or.jp/）まで。

創業塾 起業をめざすあなたを応援

日　時　12月４日(土)、11日（土）、12日（日）、12月18日（土）、19日（日）
午前10時～午後５時

場　所　大分県総合社会福祉センター（大分市大津町２丁目）

受講料　ひとり　3,000円（５日間通し）

お問い合わせ・お申し込み

大分県商工会連合会（☎ 097－534－9507）
商工会連合会のホームページからも申し込みが出来ます。http://www.oita-shokokai.or.jp

申込締切　11月30日（火）

大分県女性就業サポート事業技術講習会

平成17年１月17日（月）～２月18日（金）
10：00～16：00（土・日・祝日は除く）

講習内容　医療事務（医科）２級
受講料は無料。ただし検定試験受験料、テキスト代等は自己負担。

対　象　再就職を希望する女性で、全日程出席可能な人（定員20人）

申込日時　平成16年12月７日（火）・８日（水）
10時～14時、直接申込会場へ

申込会場　大分市東春日町1-1　NS大分ビル２階会議室

問い合わせ　ちふ連就業サポート室（☎ 097-514-5411）

農業収支計算説明会について

農業収入のある方は所得税の申告または住民税の申告について、収入金額から必要経費を差し引く収支計算により農業所得を算出し、申告していただくことになります。

次の日程で「農業収支計算についての説明会」を開催しますので、どちらか都合の良い時間帯に参加されますようお願いします。

日　時　平成16年12月１日（水）
第１回　午前10時00分開始
第２回　午後１時30分開始

場　所　九重町役場３階301会議室

問い合わせ　税務課課税係（☎ 76－3803）

今月の納税・玖珠九重農協旧支店収納窓口対応日

納付月	農協旧支店対応日	対応時間
11月	11月30日(火)	9:00～15:00

無料日曜公証法律相談

相談担当　日田公証役場公証人
予約制　平日に事前電話受付します。
（予約電話番号　☎0973－24－6751）
相談日（いずれも日曜日）
11月分は21日
12月分は５日と12日
１月分は９日と23日
場所　日田公証役場（日田市田島２丁目　日田市役所前交差点南東角）
相談内容　遺言・相続・高齢者等の財産管理・土地建物の賃貸借・金銭貸借・離婚・尊厳死宣言など
相談時間　午前９時～午後５時（１組約１時間）

消防設備点検資格者講習会

講習期日
①　第１種消防設備点検資格者講習
平成17年１月18日（火）～20日（木）３日間
②　第２種消防設備点検資格者講習
平成17年１月25日（火）～27日（木）３日間
講習会場　新日鉄大分研修センター「攻玉寮」（大分市明野南）
受講申し込み（受付）期間
平成16年12月13日（月）～17年１月12日（水）
申請書提出・お問い合わせ先
（財）大分県消防設備安全協会（☎ 097－537－3125）
＊講習の手引き（申請書）は県内の消防（局）本部にあります

国民健康保険係よりお知らせ

最近、次の内容の移動等の届け出が遅れる方が見受けられます。
届け出が遅れると保険証の利用ができなかったり、国保税が移動年月日にさかのぼり一括納入となったりしますので、下記内容の対象となった方は早めに届け出をしてください。

■ こんなときは必ず14日以内に届け出を！

		届け出に必要なもの
国保に入るとき	他の市町村から転入してきたとき	他の市町村の転出証明書
	職場の健康保険をやめたとき	職場の健康保険をやめた証明書（資格喪失証明書）
	職場の健康保険の被扶養者から外れたとき	被扶養者でない理由の証明書（資格喪失証明書）
	子どもが生まれたとき	保険証
	生活保護を受けなくなったとき	保護廃止決定通知書
	外国人が国保に入るとき	外国人登録証明書
国保をやめるとき	他の市町村に転出するとき	保険証
	職場の健康保険に入ったとき	国保と職場の健康保険、両方の保険証 （後者が未交付の場合は加入したことを証明するもの）
	国保の被保険者が死亡したとき	保険証、死亡を証明するもの
	生活保護を受けるようになったとき	保険証、保護開始決定通知書
	外国人が国保をやめるとき	保険証、外国人登録証明書
その他	退職者医療制度の対象となったとき	保険証、年金証書
	同じ市町村で住所が変わったとき	保険証
	世帯主や氏名が変わったとき	
	世帯が分かれたり、一緒になったりしたとき	
	出稼ぎや長期の旅行に行くとき	
	就学のため、別の住所を定めるとき	保険証、在学証明書
	保険証をなくしたとき （あるいは汚れて使えなくなったとき）	本人を証明するもの （運転免許証など顔写真付きのもの）

問い合わせ　保健福祉課国民健康保険係（☎ 76－3802）

＊すべての届け出には、印鑑が必要です。

今月の年金相談
日時　11月24日(水)10:00～15:00
場所　九重町役場１階・102会議室

今月の納税
納期限11月30日
【国民健康保険税】
【町　県　民　税】第３期

みんなの願い……幸せになろうね

Vol.36

「人を植える」

「一年の計りごとをなさんとするものは米を植える、十年の計りごとをなさんとするものは木を植える、百年の計りごとをなさんとするものは人を植える」これがいつものじいさまの口癖である。「人を植える」というこのじいさまの表現に息を呑んだ。これ以上に『教育』を平易に的確に表現した言葉に私はいまだ出会わない。じいさまとは、もと全国水平社の書記局長・部落解放全国委員会初代書記長・井元麟之（いもとりんし）さんであり・・・以下略。

「絵本いのちの花をつくる会」発行の『いのちの花』あとがきに作者の園田久子先生が書かれたものを転載させていただきました。

まちづくりのため、人を育てることは必要不可欠なことはわかっています。でも忘れがちなことでもあります。

次世代を担う子どもの健全育成を願いながら家庭や地域で、子どもの命や人権をみつめなおし、子どもと高齢者などが交流することで勇気と生きる力が生まれる。そんな「人を植える」そして「育てる」活動ができたらと思っています。

第5回 いのち・愛・人権フェスティバル

語ろうよ　思いを　聴こうよ　ねがいを

あなたの参加をお待ちしています。

発表の部　開催日：平成16年12月7日（火）18：30～
場　所：九重文化センター

展示の部　期　間：平成16年12月3日（金）13：00～
平成16年12月8日（水）17：00～
場　所：九重文化センター

＝平成16年11月・12月休日当番＝

病院

月	日	医療機関名	住所	電話
11月	21日	小中病院	塚脇	72-2167
		飯田高原診療所	飯田	79-2138
	23日	矢原医院	野上	77-6121
		高田病院	春日町	72-2135
	28日	長内科小児科胃腸科医院	春日町	72-2143
		麻生消化器科内科医院	山田	72-7100
12月	5日	三池循環器科内科医院	塚脇	72-6101
		友成(町田)医院	町田	78-8811
	12日	玖珠記念病院	塚脇	72-1127
	19日	井上医院	恵良	76-2711
		北山田クリニック	北山田	73-2030
	23日	友成(産婦人科)医院	塚脇	72-0330
		武田医院	森	72-0170

歯科医

月	日	医療機関名	住所	電話
11月	21日	(玖珠町)相良歯科医院	塚脇	72-0214
	23日	(日田)井上歯科医院	日田市	0973-22-3305
	28日	伊藤歯科医院	日田市	0973-24-5700
12月	5日	はたの歯科医院	日田市	0973-22-7736
	12日	たしろ歯科医院	塚脇	72-3838
	19日	樋口歯科クリニック	日田市	0973-22-8881
	23日	武内歯科医院	日田市	0973-22-3034

獣医

月	日	獣医師名	電話
11月	21日・28日	佐藤獣医	77-6448
12月	11日・19日・26日		
11月	20日・27日	山本獣医	78-9101
12月	5日・18日・25日		
11月	23日	甲斐獣医	76-3324
12月	4日・12日・23日		

スタンド

月	日	店名	月	日	店名
11月	21日	森石油	12月	5日	河野石油
	28日	小幡石油		12日	竹尾石油
				19日	森石油

備考　大分県中西部農業共済組合　☎72 3409
休日当番の電話番号(携帯)は　090-5721-8191

★都合で変更する場合があります　玖珠消防署：● 救急は119番 ☎72-2141　● 火災の確認は ☎72-5100

歳時記

季題

12月号
「小春」「冬」
「師走」（11月25日締切）

1月号
「初日」「七草」
「冴ゆ(る)」（12月20日締切）

※応募のもより締切となります。ご注意ください。

今月の季題
「紅葉」「千し柿」
「短日（暮れ早し）」

「紅葉の大パノラマに息をのみ」九酔渓に立つ紅葉の大景観、「息をのみ」は当に実感。「暮れ早し停車五分の離合かな」信号待ちのいら立たしさの実感。「暮れ早し夜のメニューの思案中」短日の家庭内での実景と実感。台所の中でも実感の表現の仕方で良句が出来る。

選者　麻生　良昭

このコーナーは町民どなたでも応募できます。ハガキに作品名と住所、氏名、電話番号をお書きのうえ企画調整課広報係までご応募を。なお、応募作品は返却しません。

紅葉の大パノラマに息をのみ　佐藤　修正
暮れ早し停車五分の離合かな　井上　マキ
暮れ早し夜のメニューの思案中　藤澤　節子
一の鳥居黄葉の山の大樹かな　甲斐　和子
露天湯の男女の仕切り夕紅葉　清竹　勇蔵
滝つぼを覗き見してるはぜ紅葉　小野十三日
山肌の紅葉まだらな九重山　佐藤　元八
庭木立紅葉の出番やってきし　玉井多喜子
千柿の向うに祖母の想ひ馳せ　原田　勝子
千柿の季節を知りつカラス来る　須藤貴久江
千し柿の皮をむく手に母思う　小野ミツノ
千し柿や自然の味覚舌鼓　湯浅加代子
暮早しボケ笑いあう三姉妹　伊東　匡子
暮れ早し二言三言話す間に　佐藤　節代
短日やライト早目の車列かな　選者　吟

添削がありますのでご了承ください。　広報

ここのえ時間旅行

ふるさと再発見　173

地名を歩く　「竜門」編（その４）

九重町文化財調査員　甲斐素純

前回記した『豊後国古城蹟並海陸路程』には「四日市村宿」とある。ここには、旅人を泊める木賃宿があったと思われる。

普通旅人は、日田方面より大分へ行く場合、戸畑平川か四日市本村、あるいは森城下あたりで一泊し、次は日出生台の切塞で中食をし、湯布院の並槻、岳本あたりで一泊し、別府へ抜けるか大分市方面へ行くかのどちらかである。

前書では続けて、「一、四日市村宿ヨリ松木村庄屋前迄壱里拾九町拾八間、溝川三ツ、拾三町程久留島丹波守領分有一、松木村ヨリ切ふさぎ迄弐里四拾六間、木きり手坂百三拾弐間、石坂百六拾八間、小坂五ツ、溝川四ツ、是ヨリ由布院ほうじが尾上弐里ほど、久留島丹波守領分有」とある。松木村庄屋が、一つの起点となっている。松木庄屋は、川上の本村、通称「ドイ（土居）」、つまり宿利商店の裏あたりに屋敷（現在は田）があったようだ。

江戸時代、幕府は各国ごとに国絵図を計五回程作成させている。正保年間（一六四四～四八）に作成された豊後国正保絵図や元禄年間（一六八八～一七〇四）作成の元禄絵図では、松木村庄屋あたりで旧道は松木川を渡っていない。しかし天保十三（一八四三）年の天保絵図では、二度松木川を渡る路線へと変化している。なおこれらの国絵図は、現在幕府へ提出されたその控が臼杵市立臼杵図書館に保管されている。つまり旧道は宿利商店前あたりで一度松木川を渡り、「字飯田」を通り丸塚の麻生勝利氏宅前あたりでもう一度河を渡っている。

麻生氏宅の県道を挟んだ反対側に、山へと入る古道が残っている。ここを通称「バンショ屋敷」（番所か）という。この道を登った所が「下馬原」。丸塚川と松木川とに挟まれた台地で、「下馬」とは馬から下りるということ。馬に乗っていても、自分より格段上位の者が乗馬で出会ったら、下位の者はすぐに下馬して敬意を表す。「下馬原」の名称から考えて、馬に乗った旅人（駕籠でも同じ）は、ここでいったん馬を降り、丸塚川を挟んだその北側にある「宝八幡宮」を遥拝したものであろう。ここには、おそらくその施設として、小さな社殿か鳥居があったのではないだろうか。

▶「豊後国絵図」の一部（臼杵市立図書館所蔵）
＊道は渡河していない。

広報ここのえ 11月号
平成16年11月17日発行（通巻582号）

人の動き

10月1日～10月31日届出分
（敬称略）

弔慰 お悔やみ申し上げます

おなまえ	年齢	行政区
篠原　英世	73	桐木
友田　守保	82	下旦五
野上　伸吉	64	岩の上
岩森　大蔵	70	釣団地
川嶋　美利	78	無田上
野上リョウ	95	寺田
北野タマ工	68	串野下
日隈　師	91	引治二
麻生　昭二	77	粟野本村
武田　忠	83	中村上
工藤喜美代	93	中央二
宇野　千歳	77	青山住宅
菅　一夫	72	下旦三
熊谷　貴子	30	書曲三
梅木　利正	89	西
竹尾　眞喜	89	桐木二
有吉　初夫	82	中村上
森　正夫	90	無田上

人口と世帯

人口	11,766 人	（－ 2）
男	5,615 人	（± 0）
女	6,151 人	（－ 2）
世帯	3,910	（＋ 1）

（　）は前月との増減

出生 おめでとうございます

おなまえ	性別	保護者	行政区
筱嶋　歩武（あゆむ）	男	勝博	無田下
佐藤　彩伎（あき）	女	亮司	陣の内上
石川倫太朗（りんたろう）	男	幸一	中央一
太田　輝（ひかる）	男	勇	鹿中村住宅
乙津　茉白（ましろ）	女	忍	中央三
秋好　奎汰（けいた）	男	宣宣	猪牟田
佐藤　祐真（ゆうま）	男	敏文	引治二

■3ページ

■2ページ

■21ページ

■18ページ

■20ページ

■16ページ

もくじ

特集　美しい九重、素敵な生活

■ 美しい九重　3
■ 素敵な生活　16
■ 保　健　22
（インフルエンザ・風しん）
■ 教育委員会だより　23
（東飯田中学校）
■ 図書館だより　24
■ ハート輝くここのえ　25
■ くらしの情報　26
■ 人権／休日当番　28
■ 歳時記／ここのえ時間旅行　29

自律に向け本格始動
～自律推進係を設置

九重町では11月1日付けで自律推進係を総務課に設置。自律に向けたまちづくりが本格的にスタートしました。係は2名で構成され、自律財政計画や事務・組織機構の改善などに関する業務を行います。

12月のお知らせ　町長と語る ふれあいタイム

12月11日（第2土曜日）

午前10時から午後4時まで。
九重町役場で行います。
お気軽においでください。

▶表紙写真は時松和弘さんが撮影（12ページに関連記事）

編集後記

「新しいということは、いつまでも古くならないこと」。小津安二郎の昭和35年監督作品「宗方姉妹」にこんなセリフが出てきます。「美しい九重」と「素敵な生活」という2部構成の特集を組んでみました。舞台は「地域」と「個人の生活」。一見別物に思えるかもしれませんが、両者には共通するものがあります。「未来は昔にある」ということもそのひとつ。登場いただいた方々の「すがすがしさ」も共通点です。ここに住む人たちの自然への向かい方は「いつまでも古くならないから、新しい」。だからこそ、外からの新しい風を受け入れる懐の深さを持てるし、「すがすがしい」のかもしれません。●最初、やはり思ったのが「大丈夫なの？」。途方もない夢に思えました。始まって3年半、トキ復活計画に集まったみなさんはすごかった。着実にコマを進めています。今回は、いつも以上に取材・編集作業が大変だったですが、全然苦痛でなく、むしろ心から楽しむことが出来ました。最後はページが足らなくなってしまったほど。自分もトキの夢に動かされたのかもしれません。夢の力はやっぱり偉大です。●トキと同じように幻となった「トキ色」。どんな色かご存じの方も少ないと思います。表紙の「ここのえ」と「11」の色。これがトキ色です。落ち着いた感じの表紙写真へ見事にとけ込みました。

人々が「素敵な生活」を送っている「美しい九重」に「夢の鳥の色」が映える・・そんなトキがきっと来るはずです。　Kochi-T

発行・九重町役場企画調査課
〒879-4895　大分県玖珠郡九重町大字後野上8番地の1
☎ 0973-76-2111
印刷・尾花印刷有限会社

町の面積　271.41㎢　／　町の木　くぬぎ　花　ミヤマキリシマ　鳥　カッコウ

資源保護のため広報ここのえは古紙配合率100%の再生紙を使用しています。R100